

ミッションを引き継ぐために

明星大学発達支援研究センター長 小 貫 悟

残念な報告がある。

今年度をもって、明星大学発達支援研究センター（MISSION：Meisei Inclusive Support Special Individuals One Person, Many Possibilities）は閉じることとなった。2014年の発足から10年目の区切りでの決断である。この2014年は我が国が「障害者に関する権利条約」に批准するという歴史的な年であり、これを機に、インクルーシブ教育システム、合理的配慮、ユニバーサルデザイン（「第二条 定義」より）が障害児者施策における重要なキーワードとなった。このような歴史的な大きな流れの中で、MISSIONは誕生したのである。MISSIONは、その研究・実践の柱として「ディスレクシア」「自立支援」「インクルーシブ教育」の3つのテーマに絞り、研究と実践可能性についての模索と意見交換を目的とした研究発信と社会貢献を重ねてきた。具体的には、社会貢献は本紀要の「明星大学発達支援研究センター歴代企画の振り返り」に、研究発信についてはMISSIONにおける研究を支えてくださった関係者からの玉稿に記されている。是非、お読みいただけると幸いである。特に公開講演会では延べ4,378名の参加者との出会いがあったのは、MISSIONが残した最大の財産である。これまでの我々の発信にご関心を寄せていただいたすべての方に感謝したい。

さて、本紀要を手にしてくださっている方が最も知りたいであろうMISSIONを「閉じる」理由である。組織的な研究の場を閉じるには、一筋縄ではいかない様々な理由があることはお察しの通りである。ネガティブな理由もポジティブな理由もある。ネガティブな理由は、センター閉所時点で語る必要が消滅する。本稿では、今後に関係するポジティブな理由のみをお伝えすることとする。

研究とは永遠の作業である。一つの研究が完成すれば、それが良い研究であればあるほど、その研究に後続する課題が明確になり、新たな研究の設定が必要になる。この研究の糸を根気強く紡いでいくのが研究者の役割である。一方で、「未来」を改善していくための研究が行われている、その時、その瞬間に、同時並行的に「今」まさに支援を必要としている子や人がいるという事実もある。ここに葛藤が生まれる。研究は「次」の世代に還元できる何かを見つけることに注力する作業であるから、その研究成果を聞いた当事者は「その通り」との感慨と同時に「もっと早く、こうした気づきに達してほしかった」という思いも持つことになる。研究と実践を標榜する場の苦悩はここにある。

ここ数年、MISSIONでは、研究成果を実践の場に移植することに力を注いできた。LDとその周辺の子（学習に苦戦する子）のための教材を500種類ほど無料ダウンロードできる「支援教材バンク」の開設はその一例である。研究的な蓄積を実践の場につまびらかにお見せすることによって、それぞれの実践の場の支援のヒントにしてほしいと願ってのことである。その成果は、1年

半足らずで延べ3万人ほどの方にご利用いただいた実績となっている。

こうした軸足の変化と今後の最善を考えたときに、MISSIONは、これまで培ってきた実力を実践の場の寄与に100%を投入すべきと判断した。その具体的な一手はMISSIONを「大学発ベンチャー」とすることによる発達障害支援会社の設立である。

その会社は「Tandem(タンデム)」と名付けられた (URL: <https://tandem-web.co.jp/>)。これは元々は「二頭立て馬車」を意味する言葉である。この名称によって、上述したような思いをベースにする「研究と実践」の二人三脚イメージを伝えたかった。ところで、二人でこぐ「タンデム型自転車」は大変有名である。MISSIONが閉じることとなった本年からは、各都道府県が道路交通法施行細則を改正し、タンデム型自転車を目が見える人が前をこぐことによって、視覚障害のある人たちも公道でのサイクリングを楽しむことができるようになった。まさに、Tandem社が目指すのがこのイメージである。我々は、支援を求める人と「タンデムしていく」。そして、これまでMISSIONを通じてご縁のあった方々からも、さらに「タンデムしたい」と応援してもらえる会社を目指そうと思う。

我々は、その姿は変える。

これまで心に刻んできたミッションに引き続きタンデムすることを誓って「発展のお別れ」をお伝えするのが、最終号のMISSIONである。